

[シンポジウム]

「語用論からの提言」に対する認知と 関連性理論からのコメント

東 森 勲

I. Jackendoff: Conceptual Semanticsについて

小泉提案に対するコメント(7d)の所有分野で所有物DOLLの代わりに10)で抽象的なMESSAGE/REQUEST/PROMISEなどのいわゆるillocutionary forceに当たるものの移動とすると、Speech actにも概念意味論は応用可能という小泉提案は興味深い。ただし、抽象物の空間移動と所有などに関していくつか問題が考えられる。

問題1 抽象物の空間移動と所有 (TO_{poss}) について

Jackendoff (2002:359)

(1) The messenger went from Paris *to* Istanbul. <Change of Location>

(2) The inheritance finally went *to* Fred. <Change of Possession>

TO_{spatial} and TO_{poss} are both innate and subscripts are just different in Spatial semantic field and Possessive field.

Conceptual Semantics:

to in (1) = TO_{spatial}

to in (2) = TO_{poss}

一方、認知意味論では空間認知が経験による基礎となり、メタファーにより、より抽象的な<所有>を理解すると説明する。

Cognitive Linguistics

to in (1) = TO

to in (2) = F_{poss} (TO)

TO is a spatial path-schema, and F is a function that maps the field of spatial images into possessional images.

概念意味論で<所有>という概念を生得的とする理由についてJackendoff (personal com-

munication) は以下のように述べている: To say that possession is “more abstract” doesn’t explain how it is learned. It is probably the case that children acquire spatial language first and use the parallels to find their way into the language for the possessional domain, but that doesn’t mean that the possessional domain is itself not innate. I think it’s significant that the possessional domain has a much more limited structure than the spatial: it has no paths other than “from-to” paths — no “toward”, no “along”, no “between”, no “sideways”, for example. The reason is that the domain is “adimensional,” that is, there is no continuous space between its “locations”, which are all persons. This shows me that the possessional domain is not “derived” from the spatial domain, rather it has its own inherent properties. <メタファーで Source domain から Target domain の mapping が一部分しか対応していないことについての問題指摘は Higashimori (2002) 参照。>

問題2 Speech actsをすべて語彙分解 (Decomposition) で分析可能か?

<関連性理論: 概念は語彙分解できない立場をとる>

Jackendoffは語彙分析の必要性を次のように述べている:

Jackendoff (personal communication): It’s necessary for learnability. Since the child has to learn concepts, they must be learned on the basis of something more primitive and (at bottom) innate. Only Jerry Fodor believes that all word meanings are totally innate and undecomposed. The problem is to figure out how to do decomposition, avoiding the arguments against necessary and sufficient conditions. That’s a lot of what chapter 11 is about.

存在論的カテゴリーはいくつ必要か? (Seven ontological categories)

Jackendoff (personal communication): I think I added a couple new ontological categories in the new book, without pretending to be exhaustive. But the argument is essentially the same. Jackendoff (2002:272)

II. Langackerの認知文法について

小泉提案についてコメント: 指示直示 (ダイクシス) でラネカーは話し手がどのように聞き手を認知するかに触れていないことが語用論的には問題だし、聞き手と話し手の位置関係とか指示物が見えるかに関して現実には多様であることをどのように図示するかが問題であるとして問題提起されている。

問題3 ダイクシス分析にはまず、空間的には3次元で、話し手と聞き手の位置関係の多様性に対応することが必要。山梨(2000:50)のいう遠空間の認知領域を援用すれば、図式の3次元化は可能かもしれないが、空間的規定のみではダイクシス分析は不十分。また、Langacker(2001)では認知文法の談話分析の道具としてGroundはthe speech event, the speaker(S) and the hearer(H), their interaction, and the immediate circumstances (notably the time and place of speech)と規定し、Current Discourse Spaceはthe mental space comprising those elements and relations construed as being shared by the speaker and hearer as a basis of communication at a given moment in the flow of discourseと規定している。GroundとPROXIMAL、DISTALという空間的なものが英語のTENSEやMODALSの文法現象にも応用できるところに意味があるという展開は分かるが、Successful communicationを前提にして、関連性理論で破棄されている話し手・聞き手の共有知識(Shared Knowledge)に基づくDiscourse分析になっているところにまず、問題がある。語用論的・認知的に問題と思われるのは、thatの使用による破線で示されたものを示す認知プロセスが、話し手と聞き手で一致していない場合などが、出てくることである。空間的处理ではなく、認知的処理が必要。関連性理論でも、指示付与が同時に異なる二つ以上のものを指す場合などは問題となる。話し手と聞き手の破線が異なるものを指す可能性もあり、解釈がゆれるのでどのように処理するかが問題。

山梨(2000:50)



Langacker(2001:145)

- (3) A: Will you fetch *that* book in the bookshelf?
 B: This isn't the one I wanted.

問題4 認知文法では構成性(compositionality)に基づき前置詞句の目的語のプロファイルの関係など結果はうまく図式しているが、聞き手による解釈にゆれがある場合に、どのように<知識>を用いて計算しその結果プロファイルされたかの途中のプロセスは不明で、常にdefaultの解釈の場合とは限らないし、語用論的には問題が残る。

<関連性理論: Ad hoc concept constructionで説明可能>

- (4) There is a bat under the table. <野球のバット><こうもり>
 (5) There is a carpet under the table. <床にひいたカーペット><丸めてしまってあったカーペット>

- (6) There is a rat under the table.
 (7) There is an ant under the table.

Ⅲ. LevinsonのGCI分析について

小泉提案に対するコメント： 小泉先生のGCIによる話し手・聞き手の伝達での完全な一致はありえないのはそのとおりのと思う。

問題5 そもそも、GCIの問題はそれぞれのheuristicの規定がすべて不十分であることである。abnormal wayとあるが、何がnormalかの規定なし、simply describedとあるが、何がsimpleな記述かの規定なし、Preferred meaningは誰にとってかという基準は不明だし、Presumptive meaningも何に基づいた推定かという基準が不明。詳しくはHigashimori (2003)を参照。

兎玉提案に対するコメント GCIはコードとして必要ではないかというご提案には以下の問題などがある。

問題6 GCIを設定することにより、発話のタイプ (Utterance type) という中間レベルをLevinsonは提案しているが、すべての記号化された言語表現にまずGCIでdefaultな読みを推意として与え、その読みを多くの具体例ではかなりの複雑さで<否定>していかないと真の解釈に至らないという余分な処理労力となり、GCI, PCIの2本立ては直感に反するもので理論上より複雑に処理することになり問題と思われる。

具体例 (その1) : Levinson (2000:117) 'Conjunction buttressing'

- (8) P and Q. → (P and then Q) <temporal sequence>
 P and Q. → (P therefore Q) <causal connectedness>
 Carston (1995) による反論:

- (9) I did the dishes and I gave the baby a bath.
 <the default rule for temporal ordering>
 the general understanding that the baby bathing followed the doing of the dishes
 <the default rule for causal connectedness>
 an instance of doing dishes causes an instance of bathing a baby
 この後者の因果関係のGCIをどのようにしてLevinsonは排除できるのか? 直感的にはこのようなGCIによるnegative informationは不必要なもので、理論をより複雑にする。さらに、例

(10) のandでは<temporal ordering>も<causal connectedness>両方のGCIを取り消すことになる。

(10) It's 30 C in Delhi *and* 35 C in Bombay.

具体例（その2）：a finger++→my fingerの場合にも同様な問題がある。

(11) Tiny doll fingers were sometimes wrapped individually because wrapping the entire hand together might *break a finger*. —WebCorp

（詳しくはHigashimori (2003) 参照）

IV. Sperber & Wilsonの関連性理論について

見玉提案2 (1) 一貫性 (coherence) を説明する原則として関連性理論は不十分ではないか。F (3) の質問—応答発話の関連性についての適格性の判断は関連性理論では不可能ではないか。

問題7 首尾一貫性に基づく理論ではdiscourse-initial utterancesやisolated utterancesの分析が難しいし、coherenceの関係は保たれていても、意味をなさない談話も存在し、問題である (Blakemore 1988:233)。また、(12) の例のように質問—答えという形式だが、Bを質問の答えでなく、とっさに相手が注意をうながしている緊急事態であるという解釈など出来なくなり問題である。

(12) A : What did she say?

B : That man has a gun. —Blakemore (2001:104)

(類例 : Sperber and Wilson (2002:14))

この例ではBの発話は質問に対する応答として、首尾一貫した (coherence) 分析でも説明可能なまともな答えの場合と、Bが目のある状況に質問とは関係なく発話した場合など首尾一貫していない場合、(関連性ではこの後者の場合もうまく説明可能で、それゆえに従来のlocal coherence (global coherenceに対する用語) に基づく説明よりも談話の現象をうまく説明できるとしている)、さらにBを聞いたAさんが目の前には銃を持った人も見えないし、Bの発話の意図がわからず、関連性がありそうと認めていろいろと計算するが認知効果がなく、最終的にはまったく理解できない場合もある。

上記 (12B) の3通りの解釈をまとめると、

- i) 質問に対する応答 (WHで示された情報を補う場合で、質問—応答をセットにして演算している場合)。12Bが12Aの直接的答えになると12Aの論理形式でShe said XのXの情報を満たすことで関連性の見込みを達成している。
- ii) 応答としてでなく、12Bのみが単独で解釈され、その場の緊急事態に対する情報で、想定銃をもった人がいれば、危険だから、すぐに逃げよ>と(12B)を用いて演算し、「すぐ逃げよ」という新しい情報がコンテキスト効果として計算し、(何らかの認知効果を持つので) 関連性を達成している。<この場合の例12Bの解釈では、質問—応答発話と2つの発話をセットにして考える必要がなく、Bのみを関連性の原則で演算している>
- iii) 応答としてではなく、12Bのみが単独で解釈され、12Bを聞いてもAさんには、回りにはだれも人がいないし、認知効果を何ももたなくて、<直感的に関連性がありそうだが、実際はirrelevantな>発話の場合

おそらく、関連性の演算をする領域 (domain) に関係する問題があります。

<質問—応答>をセットにして演算する場合、

<質問>—<応答>と分断して、後者のみで演算する場合

<質問>のみで演算する場合

<応答>のみで演算する場合

などいろいろな可能性が実際にはあるように思います。

(その他の首尾一貫性と関連性については東森 (1998) 参照)

また、Wilson, D. (1998: 68) では談話の共通トピックによる連結には問題ありとしている：
In *Relevance* (pp.216-217), we argue that what is crucial to comprehension is the contextual information rather than the discourse topic.

Blass (1990:85-86)

(13) He went to McDonald's. The quarter pounder sounded good and he ordered it.

(13)' a. McDonald's is a place where food is cooked and sold.

b. The quarter pounder is ground meat which was formed into patties, fried and put into something baked with flour...

(14) The river had been dry for a long time. Everybody attended the funeral.

Contextual information:

(14)' a. If a river has been dry for a long time then a river spirit has died.

b. If somebody has died there is a funeral.

V. 助動詞の多義性の分析について：

澤田提案：法助動詞CANの意味はもともと<根源的><認知的>の2つあるという多義説をとり、仮定的条件文の帰結節に生じるCOULDをCOULD1<客体的な根源的CANから派生(28)>とCOULD2<主体的な認知的CANから派生(31)>を提案されている。

問題8：PapafragouやGroefsemaによる関連性からの助動詞CANなどの<単義性>による分析の主張点は多義性では以下の現象を克服できないのではないかということです。

①CANの実例には能力・許可・可能性のどの意味かを決定しにくい例が多くある：

- (15) These young assistants *can* give the pupils valuable practice in understanding and speaking the foreign language. —Groefsema (1995:109)

COULDについても次の例はlogical possibility /abilityの意味決定がしにくい例がある：

- (16) So you *couldn't* do it anyway. —Biber et al. (1999:493)
(17) George Bush *couldn't* run a Laundromat. —Bybee (1990:504)

“The ambiguity of *could* can be seen in the following bit of wisdom, expressed on a bumper sticker: This statement could be taken to mean that he tried and failed (the past tense reading), or that even if he tried, he would fail (the hypothetical reading).”

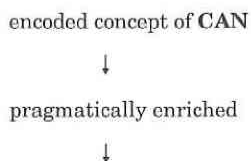
②CANには<根源的><認知的>以外にも多くの用法があるが、どのように<多義説>で説明するのか。

- (18) You *can* wash up for a change.
(19) *Can* I get you an aspirin?

COULDも以下のような多くの用法がある。

- (20) *Could* I sit here a minute, Joyce? (tentativeness) —Biber et al. (1999:485)
(21) *Could* you sign one of these two? Would you mind? (politeness)

関連性理論によるCAN (COULD) の多義性のRTによる説明：



communicated concepts of **CAN** (i.e. ability-permission-possibility)

問題9: 澤田 (28) (31) でなぜ**COULD**を扱うのに概念—統語構造でwillがでてくるのか?
<関連性理論でNicolle (1997) はwillと be going to違いを単義的で説明している>

問題10: 澤田 (35) 主体的な認識的モーダリティは仮想世界の状況を構成できないとしているが、次のような疑似条件文はどう考えるのか?

(33) 'Where's Sarah?' *If you asked me, she could be at Joe's place.*

<関連性理論ではメタ表示として解釈的用法で分析する。詳しくは東森・吉村 (2003) >

問題11: Papafragou (2000) では仮定法の**COULD**を扱っていないので、新たな分析が必要かもしれない。**MIGHT**と**COULD**の違いにも注意する必要がある。

Papafragou (personal communication): I think your idea is very interesting and worth pursuing. I haven't thought about **could** in detail but any account of the meaning of the modal must take into account also the fact that it can be used as a regular past tense of **can**, as well as a counterfactual. Notice that **might** differs from **could** in ways that remind me of the **may vs can** difference: somehow '**he might do it**' commits the speaker to the view that, if things develop as expected, he will do it, whereas '**He could do it**' does not.

ただし、**CAN**の単義性を用いて解釈的用法として仮定法の用法を説明することも可能と思われる。解釈的用法の下位区分としてSperber (1997) はmetacommunicative system, metalinguistic system, metacognitive systemを提案していて、hypothetical possibilityなどはmetalinguistic systemで扱えるとしている。形式上はメタ表示は [[]] で表し、**CAN**のメタ表示は [[P]] is compatible with D_{factual} として分析可能。D (set of propositions in a domain) をfactual, unspecified, normative以外にも設定する必要があるかもしれないので問題である。

なお関連性理論と仮定法についてはSmith and Smith (1988:348) 参照:

First, **counterfactual conditionals** have as an **explicature** the falsity of the proposition represented by the antecedent; second, and more interestingly, Relevance Theory suggests the hypothesis that **a major difference between counterfactual and indicative conditionals is that the former have the property of being necessarily 'interpretive' whereas the latter can be used either interpretively or descrip-**

tively. Utterances used descriptively represent some state of affairs in a (possible) world directly; utterances used interpretively represent some state of affairs indirectly via their representation of another representation..

問題12：法助動詞の多義性をSweetser (1990) など認知言語学ではメタファー的に拡張とあるが、Sweetser (personal communication) ではメタファーでなくメトニミーによる分析が必要と考えているということでした。

参照：Garachana and Hilferty (1997)

参考までに以下で関連性理論の新たな展開について概説しておきます。：

LEXICAL PRAGMATICS (Ad hoc concept construction)

①Lexical-pragmatic processes do contribute to explicit truth-conditional content:

Narrowing: *bird*→sea bird

Loosening: *bank*→cash dispenser

②Not all narrowing is stereotypical or analysable in terms of default rules.

③There are combinations of narrowing and loosening: I need some money. I must *run* to the bank.

関連性理論と認知 (東森・吉村 (2003) 参照)

関連性：関連性理論による語用論は聞き手の発話解釈がいかにして頭の中で行なわれるかを説明する「心の理論 (theory of mind)」である。聞き手がすばやく相手の言いたいことを理解し、自動的に意図明示的 (ostensive) 刺激 (発話も含む) にのみ反応する領域固有性 (domain-specificity) という特徴などを持つので語用論は相手の心を読むモジュール (mind-reading module) の一部に関連性に基づく理解モジュールを形成していると考え、関連性理論は最終的には人間の内的システム (sub-personal systems) の解明をめざしている [Sperber (2000:133), Carston (2002:7)]。

関連性 (relevance) とは認知プロセスへ入力となるもの (視覚・聴覚などの知覚、発話、思考、記憶、推論など) の特徴で、認知効果 (cognitive effects) と処理労力 (processing effort) により決まるものである。

関連性理論の原則1 (認知的原則)：人間の認知は関連性 (すなわち、できるだけ小さな処理労力でできるだけ多くのコンテキスト (認知) 効果を達成すること) を最大にするように方向付けられている (Sperber and Wilson 1995:260; Carston 2002:379)。

関連性理論の原則2（伝達の原則）：すべての意図明示伝達（発話も含む）行為は最良の関連性（optimal relevance）の見込みを伝達する。（Sperber and Wilson 1995²:260; Carston 2002:379）

最良の関連性（optimal relevance）とはある発話が解釈されるときに次の2つの条件を満たす場合である：（a）聞き手の注意に十分値するコンテキスト効果を生み出すこと：（b）聞き手にそのコンテキスト効果を達成させるのに不必要な処理努力を課さないことである。最良の関連性とは最大の関連性（maximal relevance）ではなく、通常は聞き手がする最初の解釈が最良の関連性のある。これはとても弱い主張である。関連性の原則が他の語用論により提案された原則、公理などと違う点は（a）人が効果的に伝達をするために知って（know）いなければならないものではないこと、（b）人がそれに従ったり（obey）、従わなかったりするものではないこと、（c）人間の伝達行動に関する例外のない一般化であることである。（Wilson and Sperber 1988:140）

参考文献

- Biber, D., et al. 1999. *Longman Grammar of Spoken and Written English*. London: Longman.
- Blakemore, D. 1988. "The Organization of Discourse." In: F.J. Newmeyer (ed). *Linguistics: The Cambridge Survey Vol. IV*, Cambridge: Cambridge University Press, 229-250.
- Blakemore, D. 2001. "Discourse and Relevance Theory." In D. Schiffrin et al. (eds.) *The Handbook of Discourse Analysis*, 100-118, Oxford: Blackwell.
- Blass, R. 1990. *Relevance Relations in Discourse: A Study with Special Reference to Sissala*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Bybee, J. L. 1995. "The Semantic Development of Past Tense Modals in English." In Bybee, J. and S. Fleischman eds. *Modality in Grammar and Discourse*, 503-517. Amsterdam: John Benjamins.
- Carston, R. 1995. "Quantity Maxims and Generalized Implicature." *Lingua* 96, 213-244.
- Carston, R. 2000. "Explicature and Semantics." *UCL Working Papers in Linguistics* 12: 1-44.
- Carston, R. 2002. *Thoughts and Utterances*. Oxford: Blackwell.
- Garachana, M. and J. Hilferty 1997. "Metaphor, Metonymy and the Grammaticalization of the Spanish Go-future." Paper delivered at ICLC 97.
- Groefsema, M. 1995. "Can, May, Must and Should: A Relevance-theoretic Account." *Journal of Linguistics* 31:53-79.
- 東森勲. 1998. 「談話と関連性」『神戸女学院大学論集』第44巻 第3号, 41-67.
- Higashimori, I. 2002. "Understanding Computer Metaphors: Relevance Theory, Levinson's GCIs and Lakovian Cognitive Semantics." Paper delivered at *Reviewing Linguistic Thought: Perspectives into the 21st Century* University of Athens 21-24 May 2002.
- Higashimori, I. 2003. "Relevance-Theoretic Objections to Levinson's GCI Theory" *English Linguistics* 20:1, 225-251.
- 東森勲. 2003. 「関連性理論の概論」『現代言語学の潮流』東京：勁草書房

- 東森勲・吉村あき子. 2003. 『関連性理論の新展開：認知とコミュニケーション』東京：研究社.
- Langacker, R. W. 2001. "Discourse in Cognitive Grammar." *Cognitive Linguistics* 12:2, 143-188.
- Nicolle, S. 1997. "A Relevance-theoretic Account of *Be Going To*." *Journal of Linguistics* 33, 353-377.
- Papafragou, A. 1998. "Inference and Word Meaning: The Case of Modal Auxiliaries." *Lingua* 105, 1-47.
- Papafragou, A. 2000. *Modality: Issues in the Semantics-Pragmatics Interface*. Oxford: Elsevier.
- Smith, N. and A. Smith. 1988. "A Relevance-theoretic Account of Conditionals." In L. M. Hyman and C. N. Li (eds.) *Language, Speech and Mind: Studies in Honour of Victoria Fromkin*, 322-352. London: Routledge.
- Sperber, D. 1997. "Intuitive and Reflective Beliefs." *Mind and Language* 12, 67-83.
- Sperber, D. 2000. "Metarepresentations in an Evolutionary Perspective." In D. Sperber ed. *Metarepresentations: A Multidisciplinary Perspective*, 117-137. Oxford: Oxford University Press.
- Sperber, D. and D. Wilson. 1986, 1995². *Relevance: Communication and Cognition*. Oxford: Blackwell.
- Sperber, D. and D. Wilson. 2002. "Pragmatics, Modularity and Mind-reading." *Mind & Language* 17, 3-23.
- Wilson, D. and D. Sperber. 1988. "Representation and Relevance." In R. Kempson ed. *Mental Representations: The Interface between Language and Reality*, 133-153. Cambridge: Cambridge University Press.
- Wilson, D. 1998. "Discourse, Coherence and Relevance: A Reply to Rachel Giora." *Journal of Pragmatics* 29, 57-74.
- Wilson, D. and D. Sperber. To appear. "Relevance Theory." In G. Ward and L. Horn (eds.) *Handbook of Pragmatics*. Oxford: Blackwell.
- 山梨正明. 2000. 『認知言語学原理』東京：くろしお出版.